

9th International Phycological Congress 開催記・参加記川井浩史^{1,2}・堀口健雄^{1,3}：第9回国際藻類学会議を終えて

2009年8月初旬。東京は例年に比べ雨が多く比較的過ごしやすい日々が続いていた。東京都心にありながら深い緑に囲まれ、施設の木立や建物越しにスカイスクレイパーを望む素晴らしい立地のオリンピック記念青少年総合センターにおいて、第9回国際藻類学会議 (9th International Phycological Congress, IPC9) は開催された。この会議は2009年8月2日(日)～8日(土)にかけて国際藻類学会と日本藻類学会との共催により実施され、会議参加者は当日登録を含め、44の国と地域から493名(海外からの参加者：335名、国内参加者：158名、教育ワークショップの参加者を除く)と盛況であった。会議は日本藻類学会会員諸氏の献身的な協力のもと、多少の問題はあったものの、概ね順調に、また好評の内に無事終了することができた。ここでは関係各位に謝意を表すとともに将来の同様の会議企画・開催に際して何らかの役にたつことを期待しつつ、準備段階を含めて会議開催の経緯を報告する。

【開催の経緯】

2005年の第8回大会IPC8は南アフリカのダーバンで開催される事が決定していたが、その4年後の2009年に我が国でIPC9を開催すべく、当時の日本藻類学会長の原慶明会員が中心となり、国際藻類学会に対し開催地として日本が立候補した。立候補に当たり、「日本は古くから海藻の利用に長けており、藻類研究の歴史も長く、世界有数の古い歴史をもつ藻類学会を中心として、現在でも藻類の基礎科学から応用まで幅広く研究をおこなっている。さらに、国際藻類学会の会員も多く、同学会への貢献度も高い。そのような背景をもつ日本において、国際藻類学会議を開催することは大変意義深い事である」といった趣旨で立候補表明を行い、その結果、他の立候補を抑えて我が国での開催が決定した。会議のプラン策定においては会場の立地が良い事、特に海外からの若者のための経済的な宿が提供できる事を重視して会場としては、東京・代々木のオリンピック記念センターを第一候補とした。しかしながら当センターは公共の、また基本的に青少年育成のための施設であることから、学会目的での数年前からの事前予約は受け付けていなかった。このため2005年に日本での会議開催が最終決定した段階でも、会場を確定することができず、不安を抱えたスタートとなった。その後、直ちに会場の確保に向けた活動をスタートし、曲折はあったが、センターのご理解もいただき予定通り会議開催にこぎ着けることができた。このすばらしい会場を利用することができたことが今回の会議成功の大きな要因のひとつであった。

さて、日本における国際藻類学会議の開催に向けた立候補は今回が初めてではなく、1997年ころにも、渡邊信会員(当時国立環境研究所、現筑波大学)、野崎久義会員(当時国立環境研究所、現東京大学)、川井らによって、オリンピック記念青少年センター

を利用して開催するプランが作成され、国際組織委員会に提出された。このプラン作成にはその直前に同会場を使って国際珪藻学会議を開催された、南雲保(日本歯科大学)、真山茂樹(東京学芸大学)、出井雅彦(文教大学)会員らの経験・情報が大きく役立った。このときは残念ながら我々の立候補は採択されず、南アフリカでの開催となったが、このとき作成された実施プランは今回の提案のひな形となったという点で大きな意義があった。

【準備期間】

IPC9開催のための国内組織としては、招致決定以来様々な組織形態で運営するプランが作られ、また予備的な国内組織委員会も数回開催された。そして最終的にIPC9国内組織委員会(Local Organizing Committee, LOC)は、井上勲会員(筑波大学)を委員長として、筆者ら2名川井浩史会員(神戸大学、前会長)、堀口健雄会員(北海道大学、現会長)が副委員長となり、準備を実施していくこととなった。藻類学会員を中心とした方々の協力を得て、組織委員会、実行委員会を立ち上げ、具体的な準備に当たることになった。両委員会のメンバーは表1に示す通りである。

井上、川井、堀口は南アフリカのダーバンで開催されたIPC8に参加するとともに、会議の運営状況についての下調べをおこなった。この大会はおそらく地理的な理由から参加者が非常に少なく、典型的なIPCとはい言難かったが、それでも会議運営を開催者という視点ももって見直すことができた意義は大きかった。閉会式において、井上会員が次期開催国の代表として、IPC9が開催される東京の様子や会場について、岡本典子会員の協力を得て作成したプロ

表1. IPC9組織委員会、実行委員会メンバー

委員長	井上 勲	実行委員	神谷 充伸
副委員長	川井 浩史		畠田 智
副委員長	堀口 健雄		北山 太樹
組織委員	原 慶明		寺田 竜太
	田中 次郎		川口 栄男
	本村 泰三		峯 一朗
	野崎 久義		本多 大輔
	寺脇 利信		今井 一郎
	奥田 一雄		南雲 保
	河野 重行		長里千香子
	片山 舒康		関本 弘之
	真山 茂樹		御園生 拓
実行委員	小亀 一弘		出井 雅彦
	河地 正伸		須田彰一郎
	石田健一郎		菊地 則雄
	宮下 英明		宮村 新一
	羽生田岳昭		Gregory N. Nishihara

モーションビデオの上映とともに軽妙なトークで紹介し、聴衆に強い印象を残した。IPC8 最終日には IPC9 に関する第 1 回の国際組織委員会 (International Organizing Committee, IOC) が開催された。同委員会議長はオーストラリアの John Beardall 氏が務めることになった。また、IPC9 の地域組織委員会 (Local Organizing Committee, LOC) は井上、川井、堀口の 3 名が Co-convenor として組織し、会議の準備・運営にあたることを提案し、了承された。この第 1 回目の会議はごく形式的なもので、詳細は第 2 回の IOC で議論することとなった。

第 2 回の IOC は、2007 年 6 月 21-22 日の二日にわたって開催された。この会議は、スペインの Oviedo で開催された第 4 回ヨーロッパ藻類学会の会期に合わせて開催されたもので、地元ヨーロッパからの参加者を中心に 10 名程度の IOC 委員に加え、筆者ら 2 名 (川井、堀口) が会議開催提案国の代表として出席し、会場の詳細、基調講演、研究発表、エクスカージョンなどのさまざまなプログラムの概要、予算の概算などについて説明した。これに先だって、Beardall IOC 議長が 6 月 9 日に会場となるオリンピックセンターを訪れて、会場の設備などについて視察をおこなっており、その報告もなされた。Beardall 議長は会場の立地、設備、交通等には大変満足である旨の意見を述べられた。この IOC にはヨーロッパの委員を中心に 10 名程度が出席し、IPC9 のプランは概ね過去の IPC の形態を踏襲したものであり、それほど議論の余地のあるものではなかったが、それでもさまざまな希望を述べられた。なかでも口頭発表の枠の数 (あるいはポスターとの比率) 等についてはかなり突っ込んだ議論があった。この IOC の会議の重要なポイントは、IPC9 で実施するシンポジウムの内容 (テーマとコンピーナー) と基調講演の演者の概要がその場で決定されるという点である。すなわち LOC は、基本的にはシンポジウムの内容やそのコンピーナーの人選に立ち入る事はできないのである。これは後々、問題を引き起こすことになるが、それについては後ほど触れる。

LOC の準備としては、会場および会期の確定、講演、研究発表やエクスカージョンなど各種プログラムの作成、会議運営業務の一部を代行するコングレスオーガナイザー (会議運営業者) の決定、予算案の作成 (参加費の確定)、などかなり重要な事項をこの第 2 回の IOC に間に合うように決定しておく必要があり、従ってこれが準備期間第一のヤマ場であったと言える。会計担当は、北海道大学の小亀一弘会員に引き受けていただいた。結果としては、若干の修正はあったものの、基本的には LOC が提案した会議運営案が了承された。

なお、参加費の振り込みなどはウェブサイトからのクレジットカード決済にすることが強く求められており、LOC としてもこれは不可欠であると考えていた。そこで、このような取り扱いが可能な運営業者の中から、業務提案内容、費用見積もり、実績などを考慮して (株) ジー・エデュケーション (G. education Co. Ltd) に依頼することとした。なお IPC9 のウェブサイトははじめ日本藻類学会のサーバー上に仮のサイトを設けていたが、2008 年 1 月からこの業者のサーバーを利用して、公式サイトとしての運用を開始した。

準備期間の 2 番目のヤマは 2nd Circular の発表に向けた準備である。ちなみに、1st Circular は A4 版三つ折りの簡単なもの (会場と会期、シンポジウムのテーマなどを告知するもの) を 2008 年 1 月に日本藻類学会員、国際藻類学会員を中心に関係者宛郵送し、詳細な会議案内 (2nd Circular) を受け取るための予備登録を呼びかけた。しかしながら、予備登録を行った方で実際に参加した人の割合は高くなく、実際にはかなりの参加者が予備登録無しでインターネット経由で情報を得て、直接申し込んだようである。一方、2nd Circular はプログラムの概要、基調講演のテーマと演者、シンポジウムのテーマと演者、参加申し込み方法、参加費の詳細、宿舍、ミッドコングレスツアー、プレコングレスツアー、などほとんどすべての情報を含んでいるものである。2nd Circular は、印刷版は作成せず、2008 年 11 月 30 日に公式ホームページ上で PDF (電子ファイル) 版として公開し、その後、順次アップデート版を公開する方式とした。なお、会議の象徴であるロゴは、国際藻類学会誌 'Phycologia' の表紙デザインも数年にわたり手がけられた中山剛会員 (筑波大学) にいくつかの候補となる原案をデザインしていただき、LOC 委員の投票により決定した。葛飾北斎の躍動する波の中に漢字の「藻」を配したデザインで、日本で開催する会議にふさわしいものとなった。

国際藻類学会は、国際藻類学会の基金から各国の学生を含む若手研究者や経済的な理由から参加が困難な国の研究者に対しこの会議に参加するための交通費の補助を行っている。今回は 500 または 600 米ドルの参加補助が、30 名程度の申請者に対して付与された。この補助金の申請の窓口も LOC の仕事であり、今回は川井がその任に当たったが、申請書類の取りまとめ、審査員への送付、審査結果の本人の通知などこれは LOC にとってはかなりの負担となる作業であった。

【参加申し込み、要旨受付、要旨審査、プログラム編成など】

今回の会議の参加申し込みは、前述したように会議の公式ウェブサイトにおいてオンライン方式で行った。しかしながら、このシステムは設計年度が古いせいか非常に使いにくく、また申し込みの管理においてもトラブルの原因になったように思う。しかし時間的・予算的な問題もあり、十分な改善ができないまま運用せざるを得なかった点は、参加者各位にお詫びしたい。この会議登録システムを用いて、参加申し込みだけでなく、要旨の受付、宿舍の予約、ミッドコングレスツアーの希望調査もおこなった。受け付けられた発表要旨は、'Phycologia' のゲストエディターとして位置づけられた科学プログラム委員会 [石田健一郎委員長 (筑波大学)、野崎久義 (東京大学)、宮下英明 (京都大学) 各会員および川井、堀口] において、本会議における研究発表として適当であるか否かの審査を行い、また 'Phycologia' 別冊としての印刷に向けた編集を行った。内容もさることながら、指定の書式に従っていないもの、字数が大幅にオーバーしているものなどがあり、同委員会では大変苦労して編集を行った。参加者は要旨を提出する際に、自分の発表がどのシンポジウムに最も関連があるか、口頭発表とポスター発表のどちらを希望するかを選ぶことになっている。

会議の準備段階でもっともフラストレーションがたまったのは入

国査証 (VISA) 発給の手続きに関するものであった。かなりの参加者が期限ぎりぎりとなってから申請されたので、その対応にはかなり振り回された感がある。また、少数ではあるが結果的に VISA の発給が間に合わず、会議に参加できなかった方もおられた。これらについては LOC としても遺憾に思う。2nd Circular の段階で、VISA 発給には時間がかかること、十分な余裕をもって申請に必要な書類をコングレスオーガナイザーに請求することなどを明記する必要があるであろう。

シンポジウムのコンピーナーは IOC が決定したが、そのほとんどが国外の方であったので、国内の対応者として、それぞれのシンポジウムに日本人のコンピーナーを 1 名ずつお願いした (表 2)。日本側のシンポジウムコンピーナーの方達に関連する演題について、口頭発表希望者の中から実際に口頭発表をおこなっていただく演題を選出していただいた。これをもとに口頭発表の編成をおこなった。国際藻類学会議の場合、発表形式の基本はポスターであるが、口頭発表希望者の中からシンポジウム等と関連して興味深い演題を LOC 側で選んで口頭発表していただくという方式となる。従って、参加者にとっては、口頭発表を希望していたが、不本意ながらポスターにまわされた方も数多くいることになるが、ご容赦頂きたい。プログラム編成については、基本的に午前中のシンポジウムの流れを受けて、午後にそのテーマと関係の口頭発表を入れるというのが原則であったが、それぞれのシンポジウムによって関連する演題の数がまちまちで、非常に関連演題が多いシンポジウムもあれば、数が少なく午後の枠を埋められないようなシンポジウムもあった。科学プログラムの編成、例えば基調講演やシンポジウムのテーマ、コンピーナーの候補者の人選などは第 2 回 IOC に先だって、委員長がメールなどで全 IOC 委員の意見を聴取し、その上で議論することになっているが、実際には第 2 回の IOC に参加することができた一部の委員の意見が強く反映され、場合によっては開催国や開催地域の実情と乖離することもある。この問題点の改善については我々から IOC や IOC 議長に申し入れをしたが、今後も IOC メンバーとなった学会員が積極的に発言し、また可能な限り IOC に出席するなどの対応をとることが求められる。その他に、どのシンポジウムにも関係づけられないが魅力的な演題がいくつかあり、それらのバランスを取りながら、プログラムの編成をおこなった。一方、ポスター発表に関しては、関連分野毎に分類して、それらを近隣に配列するようにした。

【直前の準備、そして本番】

いよいよ本番も近づき、種々の準備が同時進行するようになる。講演要旨集は、慣例にならない国際藻類学会誌 *Phycologia* の別冊として出版され、同じ冊子を会議参加者にも配付するという方法をとった。一方、今回の会議で私たちがこだわったのは、見やすいプログラムブックの作成である。従来の IPC のプログラムは小さく見てくかたり、配色が良くなかったりなどあまり良いものがあった。そこで今回は、A4 横置きとし、十分なスペースを取って見やすいプログラムブック作成に努めた。もっともアイデアはあってもそれを実行に移すセンス・技量が無ければ実現は難しい。今回は、筑波大学の中山剛会員がプログラム作成に心血を注いでく

ださったおかげで、今までにない、デザインの良い、すっきりと見やすいプログラムブックを提供できたと考えている。

プレコングレスツアーは沖縄と北海道の 2 カ所で開催することになった (提案した下田のツアーは最少催行人数に達せず中止した)。通常の IPC では会議前後のツアーが企画されるが、今回の場合、会議終了後はお盆期間に当たるため、プレのみを実施することとした。沖縄ツアーについては、須田彰一郎 (琉球大学)、大葉秀雄 (東京海洋大学)、寺田竜太 (鹿児島大学) の各会員に、北海道ツアーは、長里千香子・四ツ倉典滋 (北海道大学)、若菜勇 (阿寒町) の各会員にお世話になった。またミッドコングレスツアーは、富士山ツアーを御園生拓 (山梨大学)、鎌倉ツアーを北山太樹 (国立科学博物館)、千葉ツアーを菊地則雄 (千葉県立中央博物館)、筑波ツアーを宮村新一 (筑波大学)、東京ツアーを出井雅彦各会員にそれぞれ担当していただき、参加者が楽しめるようなツアー内容を計画していただいた。なお、ツアー関係はすべて河地正伸会員 (国立環境研究所) が責任者として、全体の進行、および旅行会社との折衝をおこなってくださった。これらのツアーは一部に交通渋滞などによる遅延などのトラブルはあったが、全体として非常に良く準備されたものであった。実際、数多くの国際会議のエクスカージョンに参加してきた「口の肥えた」海外からの参加者の多くから好意的な感想が寄せられており、これまでに参加したエクスカージョンでベストであったと手放しで称賛してくれた方もあった。鎌倉のツアーは地域の新聞でも写真入りで紹介されるなど、話題性もあったようである。

パソコンを始めとする機器の調達は阿部剛史会員 (北海道大学) が担当した。参加者に配付するコングレスバッグやグッズは、北山会員が中心となり、小亀一弘会員などの協力で準備が進行した。

表 2. 基調講演演題とシンポジウムトピックス (括弧内は日本側のシンポジウムコンピーナー)

演者	基調講演演題
T. Momotura	Fertilization, zygote development and cell division in brown algae.
C. D. Amsler	Macroalgal chemical ecology: Microscopic spores to magnificent antarctic forests.
N. Kröger	Molecular analysis of silica biomknalization in diatoms.
E. V. Armbrust	Comparative genomics of marine phytoplankton.
番号	シンポジウム / ワークショップ・トピックス
S-1	Comparative evolutionary genomics (河野重行)
S-2	Phytoplankton dynamics and life cycle (今井一郎)
S-3	Chemical ecology (関本弘之)
S-4	Frontiers of algal speciation research (神谷充伸)
S-5	Symbioses (石田健一郎)
S-6	Algae, biofuel and CO ₂ sequestration (白岩善博)
S-7	Algae under multiple stress (奥田一雄)
S-8	Biodiversity and ecological function (渡邊 信)
S-9	Algal disease (本多大輔)
S-10	Alien algae and invasive species (川井浩史)
S-11	Phylogeny - New advances and insights (堀口健雄)
S-12	Algae and bioremediation (笠井文絵)
Workshop-1	Biological and environmental education: Algae and society (島田 智)
Workshop-2	Algae in education (片山舒康)



図1. 開会式のオープニングを飾った藻類学会の誇るトリオによるアンサンブル 左から御園生拓, 田中次郎, 峯一朗の各会員。



図2. 開会式 壇上左から井上勲会員, Siew Moi Phang APPA 会長, John Bolton 国際藻類学会会長, John Beardall IOC 議長, 堀口健雄。司会は川井浩史。



図3. 講演会場の様子



図4. ポスター会場の様子

コンgresバッグはロゴの入った紺色の大型のトートバッグとし、その他に配付するグッズとして、ロゴ入りのハンドタオル、ロゴと各種藻類の絵(中山会員デザイン)の入った団扇、オリジナルクリアファイルが用意された。これらのアイテムはいずれも参加者には好評であった。

いよいよ、これらの要旨集やプログラムブック、参加者名簿、会場近隣マップ(寫田智会員、お茶の水女子大学)作成、グッズ類、会場で使用する機材類等を1カ所に集めて会場に搬入する準備をしなければならない。何せ、要旨集だけで段ボール箱20の量である。全体では、中途半端な量ではないが、この役目を快く引き受けてくださったのが、田中次郎、鈴木秀和両会員をはじめとする東京海洋大学の皆さんである。さらに、同大ではコンgresバッグへの袋詰め作業も実施してくださった。また、南雲保会員(日本歯科大学)にも荷物の運搬や会期中の物品購入などでお世話になった。

【会場設営、受付】

会場のオリンピックセンターは前日から借りることが困難であったため、開催当日の朝から準備を開始した。基調講演やパーティーなどを除くメインの会場はオリンピックセンター、センター棟の4

階および一部3階を使用した。会場の設営は、峯一朗会員(高知大学)、上井進也会員(新潟大学、ポスター会場担当)などの指揮の下にてきばきと実施され、また受付業務に関しては、コンgresオーガナイザーが担当した。初日の午後から夕方だけで、事前登録者の約7割の受付が終了した。夕方には参加者がポスターを貼れる体制まで整えることができた。もっとも、準備委員会が用意した両面テープと業者の搬入したポスターボードとの相性が悪く、貼ったそばからポスターがはがれ落ちるトラブルがあり、一時はどうなることかと思ったが、これは両面テープをより強力なものにすることで解決した。

【開会式】

開会式は、2日の16時からカルチャー棟の大ホールを使って開催された。最初に、田中次郎(ギター)、御園生拓(ギター)、峯一朗(トランペット)の3会員により結成されたアンサンブルにより歓迎の音楽演奏がおこなわれた(図1)。続いて、井上勲会員編集による、藻類ビデオが上映された。藍藻類から緑藻類にいたるすべての藻群をビデオ映像として紹介するもので、美しい映像もさることながら背景に流された音楽と太鼓の効果音は非常に効果的

で印象深いものであった。気分が盛り上がったところで、川井が司会を担当して、開会式の本体が開始された。井上国内組織委員長、John Bolton (南アフリカ) 国際藻類学会会長らによる開会の辞、堀口日本藻類学会会長の歓迎の言葉、John Beardall IOC 議長の歓迎の言葉に続き、Siew Moi Phang 氏 (マレーシア) アジア太平洋藻類連合 (APPA) 会長による祝辞があった (図 2)。引き続き、北山太樹会員による、岡村金太郎博士をはじめとする我が国藻類学黎明期に活躍された藻類学者の紹介がおこなわれた。外国の国際会議では、市長の歓迎の挨拶などがある場合もあるが、今回はそのような「よそ行き」の部分を廃し、手作りの雰囲気を出したつもりである。開会式に引き続き、場所を国際交流棟に移し、ウェルカム・レセプションがおこなわれた。



図 5. バンケットの様子

【科学プログラム】

会議における科学プログラムのおおまかな流れを以下に記す。本会議の発表数は次の通り。基調講演 4 題、シンポジウム 48 題、ワークショップ 4 題、口頭発表 96 題、ポスター 283 題、教育ワークショップ 10 題。口頭発表、ポスター発表いずれにおいても直前のキャンセルを含む数件の講演取り消しがあったのは残念なことであった。

8月3日(月)基調講演は8時45分からと少々早めのスタート。コーヒブレイクの後、平行したシンポジウムが3件。この日はこれに加えてワークショップ1件を実施した(基調講演、シンポジウムのテーマは表2参照)。午後からは、4会場(翌日以降は3会場)に分かれて様々なテーマについて合計42件の口頭発表による研究発表を実施した(図3)。さらに夜間には、2つの非公式ワークショップが実施された。なお、基調講演のトップバッターは本村泰三会員であったが、本村会員には会期を通じてオフィシャルフォトグラファーとしても活躍いただいた。

8月4日(火)基調講演、シンポジウム3件を実施(午前中)。午後からはポスターセッションを実施した。ポスターセッションには283件の参加があり、このうち当日は奇数ポスター番号の発表者による説明会を実施した(図4)。また、同じくポスター会場においては、「藻類教育に関するワークショップ」が開催された。これは日頃から藻類関係の研究活動をおこなっている小中高校生に発表の場を提供し、国内外の研究者との交流を通して、さらに藻類への興味を増してもらおうと企画した催しである。この企画の詳細については、このワークショップの責任者である片山舒康会員(東京学芸大学)の記事を参照していただきたい。ポスターセッション後、口頭発表が18件、非公式ワークショップが1件開催された。

8月5日(水)この日は、終日ミッドコングレスツアーを実施した。

8月6日(木)基調講演、シンポジウム3件を実施(午前中)。午後からはポスターセッションの偶数番号発表を実施、さらにその後18件の口頭発表を実施した。同日夜間に国際藻類学会公式バンケットを実施した。

8月7日(金)基調講演、シンポジウム3件を実施した(午前中)。午後からは18件の口頭発表を実施し。閉会式をおこない、歓送レセプションの後、会議本体は正式に閉会した。

8月8日(土)この日の正式な催しは、第10回国際藻類学会議に向けての国際組織委員会の会合のみであった。

【会議運営体制】

開・閉会式および毎朝の基調講演は大ホールでおこなった。この会場は、寺田竜太会員が担当。初日を除いては、口頭発表は3会場で実施した。会場関係は、羽生田岳昭会員(神戸大学)が中心となり、機器の操作などを実施し、スムーズな運営をおこなった。口頭発表のデータは発表者からあらかじめデータを受け取り、試写をおこなってから各会場のパソコンにデータを移すという方式でおこなった。データ受け取りは、阿部剛史、関田諭子(高知大学)、加藤藤記(琉球大学)、神谷充伸・吉川伸哉(福岡県立大学)各会員が担当した。

朝一番から夜に事務局を閉めるまで、参加者の入室が絶えることがなかったのがPCルームである。ここでは、インターネットに接続した4台のPCを用意し、参加者に自由に使ってもらった。

【バンケット】

IPC9公式バンケットは、京王プラザホテル・エミネンスホールにおいて8月6日に開催した(図5)。会場へは各自移動をお願いしたので、新宿駅の雑踏で迷子になる参加者もいるのではと心配されたが、ボランティアの方達が、辻辻に案内として立ってくれた事もあり、特に混乱はなかったようである。ところでIPCの場合は、伝統的に着座によるパーティーのため、日本では普通である立食形式は採用しなかった。2年前に会場は押さえたが、その時点では、参加者数をおよそ400名と予想していた。実際には、予想を超える参加者があったために、一部の日本人の参加者には、お願いして別室の第二会場でパーティーに参加してもらわざるをえなくなり、その点は非常に申し訳なく感じている。なお、主会場の様子はテレビカメラで逐次第二会場に中継された。また、ぎりぎりまで人数が確定しない事が予想され材料の確保がより用意であること、一部の参加者から宗教上の理由から豚や牛などを使わない料理が要望されたこと、アレルギー対応食への対応が比較的容易であったことなどを勘案して今回は中華料理を提供することになった。

バンケットの司会は福井県立大学の神谷充伸会員が行い、ユーモアに富んだなかなかの名司会ぶりであった。パーティーの冒頭に、国際藻類学会の論文賞にあたる、Christensen Award の表彰がおこなわれた。それ以後は自由な歓談の時間となった。最後に一部の国の代表がステージにあがって自国の歌を歌い、最後に日本の参加者（有志）が「蛍の光」を歌って閉会となった（図6）。

【ポスター賞】

IPC では毎回優秀ポスター賞として Papenfuss Award が授与される。そのための審査員の選定などは LOC の役目である。今回は、カテゴリーを4つ：(1) 分類・系統・種生物学、(2) 生態学、(3) 生理学・細胞学・ゲノミクス、(4) 応用藻学・教育に分類し、それぞれの部門で審査をおこなった。受賞者には表彰状と賞金が授与された。これに加えて、今回は学生のポスター発表に限って、上記4部門のうち、APPA が1部門、日本藻類学会が3部門の計4点のポスターの表彰も合わせておこなった（賞状と賞金と記念品）。学生ポスター賞の受賞者は表3の通りである。

【同伴者プログラム】

会議参加の同伴者として登録された方はおよそ30名。同伴者向けのプログラムも用意した。オリンピックセンターの茶室「桜花亭」を利用して、お茶および生け花の体験が実施された。参加者が生けた生け花は、コーヒブレイクの会場に飾られた。同伴者プログラムの企画・実施は畠田智会員に担当いただいた。また、必ずしも同伴者向けという訳ではなかったが、野田三千代会員をはじめとする海藻おしば協会のご協力を得て、海藻アート体験教室を実施した（図7）。参加者は予め用意された海藻を使い、自由な発想で海藻アートを楽しんだ。出来た作品は後日、乾燥、ラミネート処理を施した上、参加者に郵送された。

【展示】

上記の海藻おしば協会には、海藻アートの展示に関してもお世話になった。コーヒブレイクの会場に飾られた海藻アートの作品

群は、どれも素晴らしく、藻類の専門家達にとっても新鮮な驚きをもって受け入れられたようである。また、海藻アート体験教室と同じ部屋では、石川依久子会員らによる、カサノリを始めとする暖海性の生きた海藻（主に緑藻類）の展示もおこなわれた。同時にこれらの海藻に関するビデオの映写もおこなわれ、参加者の関心を引いた。この他に、いわゆる企業展示が4つの企業から提供された。

【閉会式】

閉会式は、8月7日16:30から開催された。堀口が司会を担当した。最初に井上委員長から基調講演の演者にお礼の言葉と記念品（漆塗りのお盆）の授与がおこなわれた。次に、Papenfuss Award (John Bolton 氏)、APPA 賞 (Siew Moi Phang 氏)、JSP 賞 (堀口) の表彰がおこなわれた。続いて、次回第10回大会 IPCX の LOC を代表して Dennis Hanisak 氏が次期開催地の米国フロリダ州オーランド Orland の紹介をおこなった。John Bolton 氏の閉会の挨拶がおこなわれ、最後に川井がこの会議を運営するにあたって様々な形で協力して下さった方の名前をスライドにして紹介し、謝辞を述べた（図8）。これをもって正式に IPC9 は閉会した。このあと、場所を国際交流棟に移し、フェアウェル・レセプションをおこない、参加者達はワイングラスを片手に最後の別れを惜しんだ。

【会議の成果】

冒頭に述べたように我が国で国際藻類学会議を開催する意義は大きいと考えて、私たちは会議を実施した訳であるが、最後にその成果を総括したい。

(1) 国際交流と最先端の藻学情報の交換

本会議では、43の国と地域から335名の参加者を得た。これは日本からの参加者の158名（小中高生の参加者を除く）と比較しても倍以上の数であり、国内開催ではあったが、日本人参加者に偏ることなく、本会議が真に「国際会議」と呼べる会議であったことを示している。これにより本会議は、地球規模の広い視点をもった藻学に関する情報交換の場として機能することができた。また



図6. バンケットの最後におこなわれた日本藻類学会会員による「蛍の光」斉唱



図7. 海藻アート体験教室



図 8. 閉会式 川井浩史による、スタッフの紹介と謝辞。

学生参加者は 150 名を超え、さらに若手のポスdokなどを加えると参加者の半数近くは若手研究者であり、本会議が若い研究者にとっても魅力的な国際交流の場であり、世界の若手研究者の情報交換の場としても機能したと信じたい。

上記のように、幅広い参加者を得た結果、以下に示す基礎から応用まで多岐にわたる藻学の諸分野における最先端の研究成果に関する情報交換を実施することができ、世界における藻学の発展に寄与するとともに、特に日本からの参加者を通じて今後の我が国における藻学のさらなる進展にも寄与するものとなった。IPC9 でカバーした分野は以下の多岐にわたる: 系統学, 分類学, 種生物学, 共生現象, ゲノミクス, 形態学, 細胞学, 多様性, 生態学, 生理学, 生化学, 応用藻学 (藻類燃料, CO₂ 除去, 環境修復, 養殖, 赤潮, 貝毒など), 藻類と教育。

(2) 今日の課題への挑戦

日本において本会議を開催することの意義のひとつは、我が国においても取り組みがおこなわれている環境に関する諸問題 (CO₂ 増加, 資源の枯渇, 環境劣化) に対し藻類がいかに貢献できるか, について広く情報交換をおこない, 今後の施策の在り方, 将来の国際協力の在り方を探ることにあった。これらの点について, シンポジウム, ワークショップ, 一般発表を通じて広く意見交換がおこなわれた。さらに本会議のサテライトシンポジウムとして開催された「藻類燃料研究に関する国際シンポジウム」では, 今後さらに重要視される食料と競合しない, バイオエネルギー源としての藻類の活用という問題に絞って議論がなされ, 将来の国際協力や課題克服に関してある一定の方向性を得ることができた。この点は, 今回の国際会議の大きな成果のひとつであると考えられる。

(3) 若手研究者の奨励

次世代の研究を担う若手研究者の育成は当該分野にとって重要な課題である。IPC9 では, 国際藻類学会からの資金により, 若手研究者の渡航旅費の一部を援助し, さらに優秀なポスター発表に対し, 4つの分野について, 各種ポスター賞を授与した。このような表彰は, 若手研究者のモチベーションを高めるとともに, 国際会

表 3. APPA および日本藻類学会学生ポスター賞受賞者

アジア太平洋藻類連合	Ji Won Yu	Isolation of wound-responsive genes from marine red alga, <i>Griffithsia monilis</i>
日本藻類学会	Lucie Bittner	Genetic diversity and species boundaries of Corallinales (Rhodophyta) in South Pacific Ocean
日本藻類学会	Kei Kimura	Difference of elimination timing in male mitochondria and mitochondrial DNA after fertilization between isogamous and oogamous brown algae
日本藻類学会	Keiji K. Ikeda	Interaction between <i>Microcystis</i> bloom and heterotrophic protists in a eutrophic lake, L. Inba, Chiba Prefecture, Japan

議での若手の発表の質的向上につながるものである。本会議は若手研究者奨励についても積極的な役割を果たしたと言えるであろう。

(4) 児童・生徒の参加を通した藻学の裾野拡大

IPC9 では, 日頃藻類を題材として研究活動, 自由研究を実施している児童, 生徒に対して, その発表の場を提供した。これは外国の一流研究者との交流を通じて, 自分たちの研究に対するアドバイスを受け, 今後の藻学への興味をさらに増してもらうという意図のもとに実施された。参加した児童・生徒にとっては, 英語による国際会議での発表は良い思い出になり, 自信にもなったであろう。一方, 海外からの参加者にとっては, このように若い「研究者」がいることすら新鮮であり, 小中高生の研究の水準の高さとともにこのような試みを国際会議で実施すること, すなわち我が国における藻学の裾野を拡大しようとする努力について, 国際藻類学会会長をはじめ参加者から高い評価を得たことは記しておきたい。

【謝辞】

この会議を円滑に進行し, 終了することができたのは, 偏に日本藻類学会会員のご協力の賜である。特に, 若手・中堅の会員の皆さん達は, 会議の参加者であるにもかかわらず, 多くの時間を会議の運営のための裏方として働いていただいた。この方達の献身的なサポートがなければとうてい会議の成功はおぼつかなかったであろう。一部重複するが, 以下に会場運営等でご協力いただいた会員諸氏の名前を記し, 組織委員会として感謝の意を表する (順不同・敬称略)。寺田竜太, 峯一郎, 上井進也, 羽生田岳昭, 長里千香子, 鳥田智, 南雲保, 神谷充伸, Gregory Nishihara, 鈴木秀和, 横山亜紀子, 本田大輔, 花房由香里, 上田真由美, 坂山英俊, NiNiWin, 国分夢, 吉川伸也, 関田諭子, 加藤亜記, 阿部剛史, 山岸隆博, 角江智弘, 木村圭, 佐藤大輔, 寺内真, 吉田吾郎, 松川愛未, 丸川祐桂, 孫忠民, 中村規代典 Cassio, 中本鉄平, Monica Zofia Graczyk-Raczynska, 甲斐厚。

最後になったが, 第 9 回国際藻類学会議は, 日本学術振興会から平成 21 年度国際研究集会開催の助成金を得て実施された。ここに記して感謝申し上げる。

(¹IPC9 国内組織委員会副委員長, ²神戸大学・内海域環境教育研究センター, ³北海道大学・大学院理学研究院自然史科学部門)